

2011年5月30日

ルオー保護区および周辺地域の活動報告

京都大学霊長類研究所
古市剛史

ルオー保護区およびその周辺地域では、類人猿の生息地の保全を推進するため、予算計画に即して以下の活動を行った。1) 2) 3) の活動は、地域住民の森林保全に対する理解を大きく前進させることに貢献し、4) の隣接地の新保護区設立に対しても、住民サイドからのきわめて積極的なサポートを得ている。

なお、実際の活動と予算の執行は、現地で活動を続ける特定非営利活動法人ビーリア(ボノボ)保護支援会を通して行った。

1) 診療所の運営支援

ルオー保護区周辺は、内戦を経て無医村に近い状態になっており、住民の最大の要求は医療サービスの充実である。この要求に応えることで保護活動への協力を得るため、2006年以来保護区内のワンバ村で病院の建設を進めてきた。2008年11月、保護区のあるジョル県の公共診療所として、この病院の運営が開始された。公共の診療所として運営される以上、受益者負担の原則に立って自立的に運営されることが期待されるが、病院の運営を支援するため、基本的な医薬品などを購入し寄付した。本年度は、手術用ベッドなども含めて1,167,855円の援助を行ったが、このうち1,100,000円は公益信託アフリカ基金から受けた寄付金でまかない、残りの67,855円をGrasp-Japanの寄付金でまかかった。

2) 道路、橋梁、空港等のインフラストラクチャーの整備

内戦を経て疲弊したこの地域の経済を再建するには、豊富に生産される農作物を近隣の都市部に搬出して現金収入を得られるようにするのが何よりも大切であるが、道路、橋梁、空港等のインフラストラクチャーの荒廃が障害となっている。この問題を立て直すため、ジョル県県庁およびルオー郡郡庁に1,000ドル規模の再建計画を立ててもらい、その進行をチェックしながら資金援助を行ってきている。本年度は、道路整備の支援としてジョル県に105,840円、ルオー郡に88,200円の援助を行ったほか、ルオー保護区に隣接し、新たにコミュニティーベースの保護区の設立に向けた取り組みが進んでいるIyondje村の橋の整備に6,262円を補助した。

3) ルオー保護区における保護活動への理解を深めるため、ルオー保護区内および隣接する小中学校に、ノート、ボールペン、黒板用の塗料、チョーク等の支援を行っている。今年度は、ルオー保護区内のWambaとIlongo、隣接するSemaとIyonjeの小中学校を対象に援助を行った。

4) ルオー保護区隣接地の新保護区設立に向けての密猟の監視とボノボの生息実態調査

ルオー保護区は約480平方キロメートルという小さな保護区だが、2007年以来、隣接するIyonje村がその森林の大半を新たな保護区にすることを提案し、ルオー保護区を管轄する生態森

林研究所などと共に、新たな保護区設立のための交渉と手続きを進めている。この新たな保護区が実現すれば、隣接するルオー保護区と合わせて、これまでの保護区の面積のほぼ3倍になり、長期にわたる地域個体群の維持に大きく寄与することになる。新保護区の設立が実現し、保護・管理体制が整うまでの間の経過措置として、3名の森林保護官を雇用し、密猟等の監視、ボノボの生息実態の基礎調査にあたらせた。